

## 平成 22 年度 博士前期課程学位論文要旨

## 学位論文題名

ハイリスク母子に携わる保健医療福祉専門職者の「多職種協働」への認識に関する調査

学位の種類： 修士（看護学）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 09894608

氏名：高橋 紀子

（指導教員名： 安達 久美子 教授）

目的：ハイリスク母子に携わる保健医療福祉専門職者の「協働」についての認識を明らかにすること、さらに、周産期領域に勤務する看護職における多職種協働の認識の特徴を知り問題点や課題を検討することを目的とした。

方法：広域関東圏内の周産期母子医療センターに勤務する保健医療福祉専門職者を対象とし、多職種協働の重要性と実践に対する認識について、独自に作成した質問紙を用いて調査を行った。認識に関する質問は、〈目的・目標〉、〈役割機能〉、〈プロセス〉、〈問題解決機能〉、〈人間関係〉、〈リーダーシップ〉、〈自己研鑽〉、〈職場環境〉の 8 つのキーワードから 30 項目を作成した。分析は、全ての項目について記述統計値を算出後、各属性と認識の比較について Kruskal-Wallis test 及び多重比較、 $\chi^2$ 検定を行った。

結果・考察：26 施設、1413 名に質問紙を配布した。797 名の回答を得て（回収率 56.4%）、794 名を有効回答とした。対象者の内訳は看護師 42.7%、助産師 34.1%、医師 12.6%、その他の職種 10.6%であった。多職種協働の重要性に対する認識は 30 項目中 27 項目が 80%を超えたが、実践に対する認識で 80%を超えた項目は 1 項目のみであった。多職種協働に対する重要性の認識と実践に対する認識の差は、プロセスと職場環境に関する項目で乖離しており、協働の実践を高めるためには、組織内の環境整備、カンファレンス実施の促進、多職種協働学習の促進などが考えられた。また実践に対する認識において、職種では 27 項目に有意差があり、そのうちの 26 項目で医師が最も高い認識となった。看護職は勉強会参加の認識は高かったが、人間関係やコミュニケーションに関する項目では最も低い認識であった。このことより看護職は多職種協働による精神的負担を感じ、多職種との意見交換が不得手であることが推察された。看護師と助産師の比較では 8 項目に有意差があり、同職種間でも病棟の違いにより有意差があった。実践の認識では職種以外にも、役職の有無 17 項目、年齢 6 項目、多職種協働学習経験の有無 25 項目に有意差がみられ、特に多職種協働学習の経験は重要性の認識や実践に対する認識を高めることに効果があると考えた。

結論：多職種協働に関する学習や研修を組織で行うことで、多職種協働の実践につながる事がわかった。また看護職はアサーティブ・コミュニケーションを促進することで、看護職の多職種協働実践能力が高まる可能性があることが示唆された。